父の帽子

森　茉莉

筑摩書房

父の帽子（新装版）

一九七五年八月三十日　初版第一刷発行
一九七六年一月三十日　初版第二刷発行

著者　森茉莉
発行者　井上達三
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八
電話　東京（二九一）七六五一（代表）
振替　東京六―四一二三番
印刷・多田印刷
製本・積信堂

©Mari Mori 1975 *Printed in Japan*
0095-81064-4604

目

次

父の帽子……7
幼い日々……12
二人の天使……65
注射……69
「半日」……74
明舟町の家……81
刺……102
父鷗外の思ひ出……115

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

父の死と母、その周囲……118
父と私……138
晩年の母……142
街の故郷……147
夢……153
空と花と生活……190
附記……204

裝畫　近岡善次郎

父の帽子

父の帽子

小さな怒り

私の父は頭が大きかつたので、普通の人の帽子を見馴れた眼で父の帽子を見ると平たく、横に大きい感じがして獨特で、あつた。私は父についてよく帽子屋に入つた。

番頭が出して來る帽子はどれも父の頭には小さかつた。「もう少し上等の分を見せてくれ」と父が言つた。「上等の分」といふ言葉は番頭には直ぐには分らなかつたが、意味が解ると、番頭の顏には薄ら笑ひが浮ぶのであつた。奥から出して來る帽子も、父の頭には嵌らなかつた。番頭達は人並外れて大きな頭の人を、笑ひを耐へたやうな顏で、眺めた。灰色の單衣を着て、薄茶の獻上を下手に結び、太いステッキをついてゐる父はカイゼル皇帝が浴衣を着たといふやう

で、奇妙であつたし、態度や言葉もふつうの人と少し違つてゐるので、彼等にはどんな人なのか全く解らなかつた。それで彼等は田舎から出て來たお爺さんだらうと定めてしまふらしかつた。父はさういふ番頭達に對していつも深く腹を立ててゐた。さうしてその怒りは母なぞが不思議に思ふ程ひどかつた。（父は普通、人がどうでもいいと思ふやうな小さな事に、深く腹を立てる人であつた。相手は電車の車掌、精養軒のボオイ、車夫、店員なぞで、父が怒るのは彼等が父を田舎のお爺さんのやうに扱ふ時、又は料理の名を英語で言つて解るまいといふ顏をする時なぞで、あつた。父は直ぐに正しい英語で命じ直したり、又或時には、目的地に着かないのに俥（くるま）を下りて歩いたりした。）

さういふ風にして何軒も帽子屋を廻つて歩いて、父は自分の帽子を見つけるのであつた。

私は今でも、その平たくて横に大きい父の帽子が眼に浮んで來て、懷しくてならない時がある。父が死んだあとで一度、私は父の帽子に會つたやうな氣がしたことがあつた。夫の友達の一人に父のやうな所のある人があり、その人の頭は父位大きいので、脫いで置いてある帽子を見ると、私はその帽子に父を感じた。鐵色に同じリボンの帽子、であつた。（その人は私と息子との共通の、尊敬する人物の一人である。）その帽子を見てからあと、私は父の帽子に會つて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

ゐない。

大きな怒り

私は幼い時からそばにゐて父を見てゐて、私には父が、學問や藝術に對して、山の頂を極める人のやうな、きれいな熱情を持つてゐた人のやうに、見えた。私は時々父に解らない字や、假名遣ひをきいたが、さういふ時私はいつもは大好きな父が、いくらか嫌ひになるのであつた。それは父の字や假名遣ひにたいする、異樣に烈しい心が感じられて、それがうるさく思はれたからで、あつた。私に教へて呉れようとしてゐる優しいやうすの中にも、父のまるで怒つてでもゐるやうな烈しい心がひそめられてゐて、それが私にうるさい感じをあたへたので、あつた。父は眼に見えない「嘘字」や「假名遣ひの間違ひ」といふ敵に向つて怒つてゐて、それが幼い私にも傳はるので、あつた。「パッパ、もういいわ」さう言つて私が本を持つて行かうとすると、父は、「まあ、待て、待て、」と言つて止めるので、あつた。そんな時の記憶が父の想ひ出の中に混つて、私の頭に強く殘つてゐたのだらう。十七になつて夫と歐羅巴を歩いた

時、私はいろいろな場所で「父の心」に會つたやうに、思つた。シルレル、ゲエテ、ストリンドベルヒ、なぞの字が鈍い金色に光つてゐる、伯林の本屋の薄闇の中に立つてゐるやうな時、そんな時なぞに私は「父の心」が其處にゐるやうに、思つた。私は父の、もつと極めたくて極められずに死んだ、學問への「心」が、暗い本棚のあたりに漂つてゐるのを感じ、稚い頭の中で、父の一生を考へてみるのだつた。烈しくて、さかんな、そのために寂しかつた父の一生を、私は想つてみるので、あつた。ミュンヘンの町で、家にあつた花と同じな花を見たり（父は獨逸から花の種を持つて歸つて家の庭に植ゑてゐた。）町の角で、父によく似た獨逸人を見たりする時、父の懷しさは花の匂ひのやうに私の心をかすめたが、私がひどく切なくなるのはさういふ、父の心に會つたやうな氣がする時で、あつた。

私は、帽子を買ふ時の父のやうな、つまらない事に怒る父が大好きであるのと同じやうに、私に假名遣ひを教へた時のやうにして、議論をしたり、反駁する文章を書いたりした、怒つてゐるやうな父を、いつからかひどく好きになつて來てゐる。

森の中で、たてがみを立てて咆哮する一匹の獅子が私の眼には見えてゐて、父の肖像の眼の

中にその獅子がゐるのを見る時、私はどれだけ父を好きだか知れない自分を意識するのがいつものことで、あつた。

幼い日々

小さい時の思ひ出を書かうとすると何から書いていいか分らなくて、ただ一時に或る一つの世界が心の底に、擴がつてくる。

冬はしんとした木立に圍まれ、夏は烈しい雨のやうな蟬の聲に包まれた千駄木町の家。青い木の葉が、空を暗く蔽つてゐた奥座敷、細い指で私の髪を分け、リボンを結んで呉れる母。上野廣小路の四つ角。そこには疊まれては又開いてゆく扇の玩具の、赤や金や、紫がキラキラと、陽の光にはためいてゐた。青葉を後(うしろ)にした鏡の、暗い透明の中に浮き出してゐた母の顔。衞戍(えいじゅ)病院の廊下、陸軍省の門から醫務局までの夏木立。秋も終りに近い灯ともし頃の仲見世の雜沓、ジンタの響きにまじつて流れてゐた悲しいやうな歌の聲。櫻田本郷町の雪の夕暮れ。天金の奥座敷。それらは皆明治の中に、あつた。

上野の山が遠く影繪のやうに、浮んで來る。煤煙の色に暮れた空、木々の梢。雨や風にさらされて古びた精養軒、博物館、音樂學校、美術館、低い茶店なぞがその間々にちらちらと、見えて來る。亡靈の聲のやうに湧き起つてくる廣小路の騷音……

もう夜になつた廣小路には黃色い灯が點々と輝き、地面を搖するやうな電車の響きの間を縫つて夕刊賣りの鈴の音、人力車の喇叭の音なぞが、きこえる。樂隊の音があたり一杯に鳴つて、悲しげな歌の節が流れてゐることも、あつた。人の流れの隙間から見える勸工場の內部は、晝間のやうに明るくて、その奧はなにかの歡樂境のやうに深く見え、人々の頭がうごめいてゐた。肩掛けの黑駝鳥の羽が、靑白い頰に映つてゐる母の橫顏を見上げると、それが直ぐ解つたやうに顏をうつむけ、母は私の顏を見た。

「まりちやん、勸工場へ入るかい……?」

いろいろな玩具、紅い砂糖菓子なぞを入れた硝子の箱や金紙、銀紙、南京玉がキラキラと光り、サーベルや背囊、紅と白の羽飾りをつけた軍人の帽子、喇叭なぞが下つてゐる、店の前に立止つた私が、繪草紙、人形なぞを指さすと、母はひいてゐた手を離し、帶の間から蟇口を出して銀のパチンを開け、銀貨やお札なぞを出すのだつた。

なま溫い場内から外へ出ると、賑やかな電燈の光りや足下に響く電車の軋み、人力車なぞの往き交ひも前よりはいくらか淋しくなつたやうに、思はれた。上野の森はただ眞黑く遠く見え、暗い山の影が大きく、聳えてゐる。母は私の手をひいて廣小路を拔けるとその山の方へ向つて、歩いてゆく。私は母の手を握つた手を强くし、少し足早になつた母に追ひつかうとして、小さな足で走るやうに歩いた。母の手は少し冷たくて、指のダイヤモンドが硬く痛い。山の下に近づくと私はやうやく「あゝ、俥に乘るのだな」と思ふ。山の勾配の盡きる所には五六臺の人力車が、客待ちをしてゐた。汚い膝掛けを頭から被り、それで體をくるんで蹴込みに腰かけ、寒さうに股引の膝を揃へてゐるのが暗い中に見えた。母が近づかうとして足を早めると不意に横から自轉車が、音もせずに二人の前を突切つたりする。

「えゝ、危ねえ」

母は兩手で私の肩を、痛い程强く押へて、立止まるのだつた。藍ねずみのお召なぞの母の着物は、膝にも胸にも、清心丹の匂ひがした。母と私とを認めると膝掛けを脫いだ番の車夫が、直ぐに立上つて來た。

「團子坂の上の上つた所まで行つてお呉れ。」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook